

『三国志玉璽伝』成書年代から考える唱詞のディスコース

輪田 直子*

Discourse of *San guo zhi yu xi zhuan* and its Composition Date

Naoko WADA*

*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki, Japan

はじめに

弾詞『三国志玉璽伝』（以下『玉璽伝』）は、小説『三国志演義』（以下『演義』）で有名な魏・呉・蜀の三国時代を舞台に英雄が覇を競う物語であるが、弾詞というジャンルの特徴が遺憾なく発揮され、主人公・劉備の恋愛模様なども見所となっている。現在、乾隆年間の抄本がほとんど唯一のテキストとして残っているが、その成立年代について、童万周⁽¹⁾や龔敏⁽²⁾は明末を想定している。龔氏はその根拠について、この作品が主に基づいたとする『三国志通俗演義』（嘉靖本）が明代のものであること、弾詞がすでに明末に流行していたこと、康熙帝の避諱が徹底されていないことの三点を挙げ、また龔氏は主に基づいたテキストは黄正甫本（明・天啓年間刊）であると推測されること、作品中で貂蟬が得意としたとされる「観音舞」が明末に流行し、清代に入ってからはその余勢は続かなかったことを理由として挙げている⁽³⁾。

現在、明代の弾詞は実質的にはほとんど残っていないが、盛志梅『清代弾詞研究』「上編 清代弾詞的歴史発展軌跡」において、「第一章 三 明代弾詞発展状況之考述」としてまとめられているように、明代においても弾詞が盛んに行われた様は幾つもの文献にうかがわれる⁽⁴⁾。『玉璽伝』が現存作品としてはかなり初期のものであるとは言え、明末に成立し、乾隆年間の抄本が残っている状況というのは、つまり弾詞が実際にはかなり盛行していたであろう時期に成立していたということである。しかし一方、テキストが刊本として出版されず、現在伝わる抄本も唯一種であることから、決して人気のあった題目であったとはいえない状況も推測される。

筆者は前稿⁽⁵⁾において、『玉璽伝』のディスコースの主に説白部分について分析を加えたが、この作品の説白は全体の分量の約5%に止まり、説白の語句自体も必ずしも『演義』を襲っているとは言いがたいく、その叙述には唱詞との連続性や分量の多寡に何らかの意図を見出すことができた。また、『玉璽伝』の説白は前半部分ではそれなりのウェートを占めるものの、後半になるにつれ徐々にその分量が減少し、最後の巻二十では完全に説白が排除され全編唱詞となっている。このような状況について作品の展開から考えた場合、『玉璽伝』の巻二十は曹丕の篡奪から三国鼎立以降、最終的に三国が再び晋に統一されるまでを描いているのだが、これを『演義』に対応させてみれば黄正甫本では全二十巻のうちの十四巻以降、嘉靖本でも全二十四巻のうちの十六巻以降の分量ということになり⁽⁶⁾、全体の約三割に相当することになる。小説に比べ『玉璽伝』がいかに急ぎ足で物語を収束させようとしているかがわかる。さすれば、物語の内容も小説からの大幅な省略、あるいは大胆な改編が行われたであろうことが容易に推測される。そのオリジナリティーが小説の文体、さらには説白を離れ、唱詞という形を選択させているようである。

本論は、明末清初の弾詞テキストの状況を念頭に置き、『玉璽伝』が選択した唱詞のディスコースについて関連する弾詞作品も併せて検討することを目的とする。

1. 『玉璽伝』の唱詞～細緻な表現

『玉璽伝』は前稿でも確認したが、弾詞としては中編の約38万字からなり、散文で語られる説白

*石巻専修大学人間学部人間文化学科

部分は約 19,000 字、全体の約 5% に止まり、大部分は七字句の唱詞で構成されている。全二十巻の中で、前半に説白が多く配置され、後半になるに従い説白の分量は減少していく。

唱詞部分は、語り手が物語内容を語る部分と、登場人物のセリフ及び登場人物の心情表現の三者に分けられる。心情表現には登場人物の直接的な表現と、語り手を介して語られる間接的な表現の二種が存在する。この中では当然のことながら物語内容を叙述する言説が最も多くなるが、一般的な弾詞の表現の常として、『玉璽伝』の唱詞もそのいずれもが概して極めて細緻な表現をとる。

物語内容の細緻な表現としてよく取られるのが、物語の現場を詳細に描写する方法である。巻二の王允・貂蟬による連環計の場面を見てみる。連環計自体はすでに『演義』で委曲を尽くした物語として展開しているが、『玉璽伝』の独自性は、例えば、王允が初めて呂布を自宅にてもてなす際の宴の準備の具体的な描写について、『演義』と比較すれば一目瞭然である。

(黄正甫本) 允設宴。(巻之二)

(嘉靖本) 允料布必来，允備嘉肴美饌，好酒細果等候。(巻之二)

(玉璽伝) 使人回稟司徒府，王允聞知使用心。妙手庖人忙点用，奇珍美味滿鋪陳。展開金雀招佳客，帘卷香風隱麗人。玳瑁筵上珍饈滿，琥珀瓶中玉露傾。風花閣設迷魂陣，錦繡排成陷馬營。上智怎開金串鎖，搜神難解玉環珍。欲施双手扶天日，先使紅裙拂汚塵。金釵十二排行到，珠翠東西左右分。虎皮交椅高鋪上，犀杯巨觥噴香酒。龍涎麝腦金獅鼎，碧玉栽栽丹桂馨。(巻二)

このほか、あるプロットについて『演義』では登場しない脇役が顔を出すことによって展開に彩りを添えることが頻見され、連環計では董卓の老母、呂布の正妻・嚴氏、貂蟬の侍女たちの登場によって膨らむエピソードがいかに家庭生活を描く弾詞らしい趣を感じさせる。

一方、登場人物の繊細な心情表現も男女・主役脇役を問わず全編にわたって披瀝されているが、例えば同じ連環計に関する場面では、呂布が貂蟬を手に入れるまでの狂おしい恋情、董卓に対する激しい怒りに多言を費やす。

將軍不免和顔坐，心下思量忿忿噴。酒在面前渾不

吃，只意貂蟬女一人。可惜無双姣媚女，今宵一旦属他人。事故傾成難再得，世間料道再無人。曾把玉環来為記，鳳頭簪在那辺存。皆因関上回来晚，錯了姻縁与別人。懊悔頻頻連嘆息，…。(巻三)
司徒陪伴身歸寝，温侯煩惱夢難成。側倚欄杆閑望月，無聊凄切冷清清。月光一色人人共，幾處悲歡事不均。他人春映芙蓉帳，今宵快活勝三春。我身在此挨清冷，寂寞偏嫌更漏深。坐对孤灯心恍惚，呆呆望月听虫鳴。只見銀河清淡淡，偏生不易到天明。独倚欄杆無聊賴，口占一曲解愁心。(巻三)

また、連環計の主役を演じる貂蟬の人物像も『演義』に比べ複雑化している。『演義』における貂蟬は漢の忠臣・王允の養女として、あくまでも計略を忠実に遂行するのみで、表面的な媚態はともかくその胸の内が吐露されることはないが、『玉璽伝』では明らかに呂布に同情的である。

呂布今年方廿五，容顔美麗又精神。更兼眉目多清秀，齒白唇紅脂粉形。為此貂蟬心亦愛，兩情相合一般同。(巻二)

貂蟬心下多歡喜，花容重整做新人。温侯合卺同交拜，兩意歡娛喜遂盟，連環今日成連理，鳳頭簪子共全明。(巻三)

それでは、『玉璽伝』全体を見渡した時、『演義』に存在するプロットと『玉璽伝』独自のプロットとでは、その唱詞のディスコースに差異が生じるのか、次章以降で検討することにする。

2. 『玉璽伝』の構成

『玉璽伝』の物語は基本的には『演義』に基づいているので、各巻の概要を対応する黄正甫本⁽⁷⁾の巻数・タイトルで示し、併せて『玉璽伝』独自の主要プロットを注記し、全体の構成を確認しておきたい。なお、★印については、次章以降で説明を加える。

玉璽伝	黄成甫本
巻一	【巻之一】祭天地桃園結義、<u>劉玄德</u>斬寇立功、<u>安喜県張飛</u>鞭督郵、<u>何進</u>謀殺十常侍、<u>董卓</u>議立<u>陳留王</u>、<u>呂布</u>刺殺<u>丁建陽</u>、<u>曹操</u>刺<u>董卓</u>私奔 ・劉備は新帝と陳留王を探しに来た北邙山で、張譲が河中に落とした玉璽を発見。さらに進むうち黒松林の山賊の頭・<u>邢彪</u>と遭遇し、娘・<u>邢姣花</u>の婚に望まれるが、<u>邢彪</u>は弟分の<u>嚴</u>言が張飛の敵だと知らされ、報酬につられ劉備を殺そうとするも、<u>邢姣花</u>が助ける。劉備はお礼に玉璽を<u>邢姣花</u>に預け、<u>榮達</u>を勧め、婚約をして去る。董卓が新帝らを探し当てた場に劉備も居合わせる。その後、<u>邢彪</u>は刑部に捕らえられ、<u>嚴</u>言とともに刑死、残された<u>邢姣花</u>は董卓の慰み者になるのを避けるため、玉璽を抱いたまま井戸に身を投げる★1。
巻二	【巻之一】<u>曹操</u>刺<u>董卓</u>私奔、<u>曹操</u>興兵殺<u>董卓</u>、<u>虎牢関三戦</u><u>呂布</u>、<u>董卓</u>火焼<u>長樂宮</u>、<u>袁紹</u><u>孫堅</u>奪玉璽、【巻之二】<u>趙子龍</u>盤河大戦、<u>孫堅</u>跨江戦<u>劉表</u>、司徒<u>王允</u>説<u>貂蟬</u> ・劉備は平原へ戻り玉璽を託した<u>邢姣花</u>の身を案じていたが、夢で会った仙女が<u>邢姣花</u>で、既に死亡していたこと、来世で縁があること、玉璽がいずれ手元に戻ることを予言される★1。 ・連環計で初めて<u>呂布</u>が<u>貂蟬</u>と引き合わされる場で、二人の容貌や情愛を交わす様子、結納の取り決めなどが詳細に描写される。
巻三	【巻之二】司徒<u>王允</u>説<u>貂蟬</u>、<u>鳳儀亭</u><u>呂布</u>戯<u>貂蟬</u>、<u>王允</u>定計誅<u>董卓</u>、<u>李傕</u><u>郭汜</u>寇<u>長安</u> ・連環計の全貌が全編にわたり詳細に描写され、董卓死後、<u>貂蟬</u>は<u>呂布</u>の妻となる。
巻四	【巻之二】<u>李傕</u><u>郭汜</u>寇<u>長安</u>、<u>李傕</u><u>郭汜</u>殺<u>樊稠</u>、<u>曹操</u>興兵報父仇、<u>劉玄德</u>北海解困、<u>呂奉先</u>濮陽大戦、<u>陶謙</u>三讓<u>徐州</u>、<u>曹操</u>定<u>陶破</u><u>呂布</u>、【巻之三】<u>李傕</u><u>郭汜</u>乱<u>長安</u>、<u>楊奉</u><u>董承</u>双救駕、<u>遷鸾</u>興<u>曹操</u>秉政 ・劉備と陶謙の部下である<u>糜竺</u>の妹・<u>緑筠</u>との結婚にまつわる因縁（4章で詳述）★2。
巻五	【巻之三】<u>遷鸾</u>興<u>曹操</u>秉政、<u>呂布</u>月夜奪<u>徐州</u>、<u>孫策</u>大戦<u>太史慈</u>、<u>呂布</u>轅門射戟、<u>曹操</u>興兵征<u>張繡</u>、<u>袁術</u>七路下<u>徐州</u>、<u>曹操</u>会兵擊<u>袁術</u> ・曹操軍が張繡を降伏させた際に、張繡の伯父の未亡人・<u>鄒氏</u>を侍らす。その美貌の様が詳細に描写される。
巻六	【巻之三】<u>曹操</u>会兵擊<u>袁術</u>、<u>賈詡</u>談兵決勝負、<u>夏侯惇</u>拔矢啖睛、【巻之四】<u>呂布</u>敗走下<u>邳城</u>、白門樓<u>曹操</u> <u>呂布</u>⁽⁸⁾、<u>曹操</u>許田射鹿、<u>董承</u>密受衣帶詔、<u>青梅煮酒論英雄</u>、<u>関雲長</u>襲斬<u>車胄</u>⁽⁹⁾、<u>曹操</u>興兵拒<u>袁紹</u>、<u>関張</u>擒<u>劉岱</u><u>王忠</u>、<u>禰衡</u>裸体罵<u>曹操</u>、<u>曹操</u>三勸<u>吉平</u> ・呂布が曹操・劉備に斬られた後、呂布の妻・<u>嚴氏</u>は自死、<u>貂蟬</u>は関羽に斬られる⁽¹⁰⁾。 ・袁術が死に、手元にあった玉璽が敵帝の手に戻る。
巻七	【巻之四】<u>曹操</u>三勸<u>吉平</u>、<u>曹操</u>勒死<u>董貴妃</u>、<u>玄德</u>匹馬走<u>冀州</u>、【巻之五】<u>張遼</u>義説<u>関雲長</u>、<u>雲長</u>正馬刺<u>顏良</u>、<u>雲長</u>延津誅<u>文醜</u>、<u>関雲長</u>封金掛印 ・入宮した曹操の娘の美しくはあるが父の威光を笠に着た傲慢な振る舞いが描かれる。 ・曹操に投降した劉備の二夫人の嘆きが詳細に語られる。
巻八	【巻之五】<u>関雲長</u>封金掛印、<u>関雲長</u>五関斬将、<u>雲長</u>搥鼓斬<u>蔡陽</u>、<u>劉玄德</u>古城聚義、<u>孫策</u>怒斬于神仙、<u>孫権</u>領衆拋<u>江東</u> ・関羽に連れられて劉備のもとへ向かう二夫人の心中が詳細に語られる。 ・孫策の臨終の際の大喬の心中が詳細に語られる。
巻九	【巻之五】<u>孫権</u>領衆拋<u>江東</u>、<u>曹操</u>官渡戰<u>袁紹</u>、<u>曹操</u>烏巢燒糧草、【巻之六】<u>曹操</u>倉亭破<u>袁紹</u>、<u>劉玄德</u>走<u>荊州</u>、<u>袁譚</u><u>袁尚</u>争<u>冀州</u>、<u>曹操</u>決水滄<u>冀州</u>⁽¹¹⁾、<u>曹操</u>引軍渡<u>壺関</u>、<u>郭嘉</u>遺計定<u>遼東</u> ・孫策が死し、遺された大喬の嘆き。妹の小喬（周瑜夫人）が駆け付け面倒を見る。 ・袁紹が曹操に敗れて後、城内に遺された次男・<u>袁熙</u>の未亡人・<u>甄氏</u>が曹丕に見初められ、袁一族の助命のためやむなく再嫁を決断をする一段が詳細に語られる★3。
巻十	【巻之六】<u>劉玄德</u>赴<u>襄陽</u>会、<u>玄德</u>躍馬跳<u>檀溪</u>、<u>劉玄德</u>遇司馬<u>德操</u>、<u>劉玄德</u>新野遇<u>徐庶</u>、<u>徐庶</u>走薦<u>諸葛亮</u>、【巻之七】<u>劉玄德</u>三顧<u>諸葛亮</u>、<u>玄德</u>風雪謁<u>孔明</u>、定三分<u>諸葛</u>出茅廬 ・諸葛亮が臥龍崗を出る際、妻・<u>黄氏</u>に後事を託す。<u>黄氏</u>は<u>黄承彦</u>という賢人の娘で、容貌は劣るが聡明で、夫と仲睦まじい。
巻十一	【巻之七】定三分<u>諸葛</u>出茅廬、<u>孫権</u>跨江破<u>黄祖</u>、<u>孔明</u>遺計救<u>劉琦</u>、<u>諸葛亮</u>博望燒屯、<u>王燦</u>説<u>劉琮</u>降曹、<u>孔明</u>火燒新野県、<u>劉玄德</u>走<u>江陵</u>、<u>長坂坡</u>趙雲救主、<u>張飛</u>渭水断橋⁽¹²⁾ ・呉の宿敵の<u>黄祖</u>を破る戦いが簡略に語られる。 ・糜夫人が阿斗を趙雲に託し自ら壁の下敷きとなり死亡する（4章で詳述）★2。阿斗は三歳にして母の不在を悟る聡明さがあった。
巻十二	【巻之七】<u>張飛</u>渭水断橋、【巻之八】<u>劉玄德</u>敗走<u>江夏</u>、<u>諸葛亮</u>舌戰<u>郡儒</u>、<u>諸葛亮</u>激<u>孫権</u>、<u>諸葛亮</u>説<u>周瑜</u>、<u>周瑜</u>定計破<u>曹操</u>、<u>周瑜</u>三江戰<u>曹操</u>、<u>群英会</u><u>周瑜</u>智<u>蔣幹</u>、<u>諸葛亮</u>計服<u>周瑜</u>、<u>黄蓋</u>献計破<u>曹操</u> *黄正甫本とほぼ同じ。

『三国志玉璽伝』成書年代から考える唱詞のディスコース

卷十三	【卷之八】黄蓋献計破曹操、閔沢密献計降書、龐統智進連環計、曹孟德橫槊賦詩、曹操三江調水軍、【卷之九】七星壇孔明祭風、周公瑾赤壁塵兵、曹操敗走華容道、関雲長義釈曹操、周瑜南軍戰曹仁、諸葛亮値一氣周瑜 ・赤壁開戦前夜、長江に船を浮かべ宴を催す曹操が、天下の名勝たる江南への渴望を語る。
卷十四	【卷之九】諸葛亮傍掠四郡、趙雲智取桂郡、黃忠魏延献長沙、孫権合肥大戦、周瑜定計取荊州、玄德智娶孫夫人、【卷之十】趙子龍看錦囊救主 ・諸葛亮が趙雲・張飛・関羽らを動員し、荊州の四郡を手に入れる戦いが簡略に語られる。 ・卷一で死亡した邢姣花が天界で仙女となり、後、転生する（4章で詳述）★1。 ・劉備の甘夫人が夢で仙境に入り、間もなく死亡（4章で詳述）。 ・劉備が孫権の妹・孫万金と結婚し、東呉での新婚生活に耽溺する様子が詳細に描かれる。周瑜と孫権は、さらに歌妓を送り込み劉備を骨抜きにしようとするが失敗する★4。
卷十五	【卷之十】趙子龍看錦囊救主、諸葛亮二氣周瑜、曹操大宴銅雀台、諸葛亮三氣周瑜、諸葛亮弔喪周瑜、張飛未陽薦龐統、馬超興兵犯潼関、馬超渭橋大戦、馬超大戦許褚、馬超歩戦五将 ＊物語の進行が黄正甫本とは一部異なる。「曹操大宴銅雀台」のプロットは「張飛未陽薦龐統」の後に置かれる★5。 ・周瑜を亡くした妻・小喬の嘆き、遺された家族の様子が詳細に描かれる。
卷十六	【卷之十】張松返難楊修、龐統献計取西川、【卷之十一】趙子龍截江奪幼主、曹操興兵下江南、劉玄德斬楊懷高沛、黃忠魏延大争功、落鳳坡乱箭射龐統 ・劉備が西川出兵後、万金が東呉へ戻ったがための苦悩の姿（5章で詳述）★4。
卷十七	【卷之十一】落鳳坡乱箭射龐統、張飛義釈嚴顔、孔明定計擒張任、楊阜借兵破馬超、葭萌関張飛戰馬超、劉玄德平定益州 ・龐統が戦死したことを悼む劉備らと家族の様子が語られる。 ・諸葛亮に後事を託され荊州を治めることになった関羽は、故郷の蒲州から妻と息子の花関索を呼び寄せるが、後、妻・花氏が亡くなり後添えに胡氏を娶り、関興と娘が生まれる。関索は天上から転生した者で、功を立てた後二十歳で天に帰る⁽¹³⁾。 ・西川の太守の座を劉備に譲った劉璋は妻・費氏らを伴い南郡へ移るが、劉璋の兄・劉瑁の未亡人・呉氏は兄の呉懿が劉備の臣下となったことで西川に留まることになり、費氏と涙で別れる★1。 ・東呉に戻された万金の苦悩（5章で詳述）。劉備に派遣された孫乾が孫権に万金を返すようお願い出るが、劉備自ら来ない限り妹は帰さないと拒絶され、空しく帰国する★4。
卷十八	【卷之十一】劉玄德平定益州、関雲長赴単刀会、曹操杖殺伏皇后、【卷之十二】曹操漢中破張魯、（張遼大戦追遙津、甘寧百騎劫曹營）、【魏王宮左慈擲盃、曹操試卜管輅、耿紀韋晃討曹操】、（瓦口関張飛戰張郃、黃忠嚴顔双建功、黃忠臧斬夏侯淵、趙子龍漢水大戦、劉玄德取漢中、曹操殺主簿楊修）、【卷之十三】劉玄德進位漢中王、（略）、劉玄德哭関雲長（＝呉緑筠との因縁） ＊（ ）内のプロットはほぼ省略、〔 〕内のプロットは卷十九へ移動。「劉玄德進位漢中王」以降では『演義』にはない邢姣花の転生した呉氏と劉備の縁のプロットが語られる。 ・関羽の五十三歳の誕生日が盛大に祝われ、張飛・趙雲も荊州に駆け付ける⁽¹⁴⁾。 ・諸葛瑾が孫権の使者として荊州を還すよう西川にやってきた際、劉備は万金への手紙を託す。漢中王の即位式に臨み、栄華を喜びながらも夫人の不在を劉備は嘆く★4。 ・邢姣花は転生して呉懿の妹となる。劉備は彼女の残した詩から邢姣花の生まれ変わりであることを察し、紫虚上人の占いとそ地の池に映る女性の姿が邢姣花そのものであったことからこの縁を確信し、諸葛亮の強い勧めもあり、呉懿に結婚を申し込む。呉懿は承諾するが、呉氏は貞節を守るため首を吊る★1。
卷十九	【卷之十三】劉玄德進位漢中王（＝呉緑筠との婚姻）、（関雲長威震華夏、龐徳擡檣戦関公⁽¹⁵⁾、関雲長水滄七軍、関雲長刮骨療毒、呂蒙智取荊州、関雲長大戦徐晃）、（関雲長夜走麦城、玉泉山関公顯聖、）【卷之十二】魏王宮左慈擲盃、曹操試卜管輅、耿紀韋晃討曹操、（略）【卷之十三】曹操殺神医華佗⁽¹⁶⁾、魏太子曹丕秉政、【卷之十四】曹子建七步成文、（漢中王怒斬劉封）、曹丕篡位称帝 ＊（ ）内のプロットはほぼ省略、〔 〕内のプロットは卷二十へ移動。 ・呉氏は自殺を図るが、司馬徳操（水鏡先生）＝紫虚上人が現れ救い、劉備から玉璽を見せられた呉氏は遂に前世の縁を思い出し、婚姻を承知する。劉備は呉氏との生活に耽溺する★1。
卷二十	【卷之十四】曹丕篡位称帝、漢中王成都即帝位、【卷之十三】劉玄德進位漢中王（※一部のみ）、【卷之十三】関雲長夜走麦城、玉泉山関公顯聖、【卷之十四】范彊張達刺張飛、【卷之十五】白帝城先主託孤 ＊『演義』の内容は一部のみで、大半はオリジナルのプロットが描かれる。 ・曹丕が献帝から譲位され、玉璽は曹丕の手に渡るが、受禅台で狂風が起こり玉璽は失われる。その後、襄陽の漁師・張嘉が川で玉璽を発見、西川に届け、これより劉備の手に渡り、劉備は帝位に就く。太子の劉禪は張飛の娘を太子妃に迎え、睦まじい様が詳述される。 ・万金の劉備との別離の苦しみと、その後の悟りについて（5章で詳述）★4。 ・献帝の娘二人は曹丕の後宮に入るようになったが、篡奪者に嫁ぐのを良しとせず二人して縊死する。 ・献帝が山陽公に封じられ曹后と任地へ向かう途上、華歆が下太後の誕生日を理由に曹后を呼び戻した隙に、山陽公は毒殺される。富貴を謳歌していた曹后は山陽公の亡霊のために病を得て死亡する。 ・劉関張の三兄弟は元紫微星の守護神で、揃って下界に降り揃って天界に帰った。関羽は元南天の守護神で、顔良・文醜がそれぞれ呂蒙・陸遜に転生し関羽に怨みを晴らし、関羽は関平とともに天界に戻り南天を守る。張飛は元黑旗軍の守護神、天の掟を破り下凡し、誤って殺した小者二人が転生した范彊・張達に殺され、元通り北極星で守護する。

3. 『玉璽伝』の物語進行の指向

上記の表に挙げたように、『玉璽伝』のディスコースの特徴は、何と言っても人物の心情や具体的なやりとりが詳細に描かれることにある。プロット自体は連環計のように元来『演義』に存在するものがほとんどであるが、そこに『玉璽伝』が何らかの意図を持って手を加え、多くの場合は詳細な描写と大胆な削除がバランスよく作用している。その中でこの傾向とは別のアレンジの方法として、『玉璽伝』が『演義』の時間進行をあえて入れかえるパターンが見られる。『玉璽伝』の改編の方向性として、まずこのような二例を挙げその効果を確認してみたい。

表中の★3は曹丕が袁熙の夫人・甄氏を手に入れる件について。『演義』ではこの時点で袁熙はまだ死亡していないのに対し、『玉璽伝』ではこの時すでに袁熙が死亡しており（「袁熙出陣身亡了、」）、甄氏が確かに未亡人であり、袁熙が甄氏を見捨てたという見方が、曹丕（「可惜袁熙無福分、拋棄無双美貌人。」）や、姑の劉氏（「莫怨今朝身失節、只怨前夫負你身。青春年少相拋棄、不孝袁門誤了身。」）などの口から語られる。また、曹丕はすでに十八歳でありながら、まだ妻のいない身であるという説明もあり、両者の結びつきの正当性・純粋さを強調する描写となっている。これを受けて、巻九の最後の部分では、「…、再談袁譚袁尚身。…密把二人來殺了、」とあるが、『演義』ではこの時点では先に袁譚は曹操軍に殺されているため、この「二人」は袁尚と袁熙になっている。『玉璽伝』が物語の展開を変えるために、緻密に矛盾を解消していることが見て取れる。なお、甄氏はこの縁談に拒絶反応を示していたが（「傷心苦痛如花女、以死亡生不順情。婦人豈可忘名節、不做偷生怕死人。情愿曹公刀下死、不同公子結成親。」）、袁氏一族を救うためと姑の劉氏に懇願され、やむなく受け入れる。夫が生きている状態の『演義』に比べ甄氏の貞節への意識がさらに強いことも強調されている。

ところが、最終の巻二十では曹丕が帝位に就いた後、甄氏は皇后に冊立されたものの、すでにその寵愛は郭氏に移っていることが述べられる（「甄妃冊立為皇后、掌印昭陽第一人。庶子今封皇太子、母子恩榮不可倫。漢有寵姬名郭氏、十分容貌画難

成。今朝入召新宮内、貴妃之職重加恩。只為此人生得好、奪了娘娘甄氏恩。忘了冀州相叙意、恩心付与郭夫人。只因太子身長大、君王不好十分輕。雖然冊立昭陽殿、鸞車稀到正宮門。惟有郭氏多歡喜、三千寵愛在他人。」）。これでは、当初の曹丕の甄氏への純愛の効果も台無しで、甄氏にとっての無情な展開を際立たせることになっている。

★5では「曹操大宴銅雀台」のプロットが、『演義』の進行とは異なり『玉璽伝』では「張飛未陽薦龐統」の後ろに配置されていることに伴い、物語の内容にも改編が加えられる。『演義』では銅雀台で宴する曹操のもとへ孫劉家の婚姻が調い、劉備が荊州九郡をほぼ手中にしたという報告が入り、劉備を牽制したい曹操は、荊州四郡を巡って劉備・孔明に遺恨を持つ周瑜を南郡の太守に封ずることで敵対関係をおおる。両家の争いはその後さらに激化、周瑜は孔明に追い詰められ憤死することになるのだが、曹操の周瑜への冊封がこの結果に一役買っていることになる。その後、曹操は再び東呉に攻め込もうとするが、遠征中に西涼の馬騰に許都を落とされるのを警戒し、あらかじめ計略で呼び寄せこれを殺す。父の怨みを雪ぐため息子の馬超が大活躍を見せる場面がこれに続くといった流れになる。

一方、『玉璽伝』の展開は銅雀台の場面が後置されることで、周瑜が憤死に至る過程が連続で語られ、これに続き遺された妻・小喬の嘆きや孫権ら東呉の困惑から龐統登場までが一通り因果づけて描かれる。よって、その後に展開する銅雀台の場面ではすでに周瑜が死亡しており、曹操が孫劉を牽制するために利用しようとするのは周瑜ではなく、馬騰にこの役目を担わせて劉備を征伐させる作戦をとる。しかし、曹操の意に反し、馬騰は獻帝から直接曹操打倒の命を受け、これが発覚したため曹操によって倒されることになる。

つまり、両者を比較すると、曹操の孫劉同盟への警戒が『演義』では短期間で二度現れており、重ねて描くことで曹操の孫劉同盟への警戒感が強く印象づけられ戦略的な面白さも強調されているのに対し、『玉璽伝』ではこれを一度にまとめ、むしろそこから生ずる矛盾点もきちんと解消した上で、代わりに周瑜を失った小喬の嘆きなど情緒的な描写に多くを割くという明確な違いが見られ

る。おそらくこのような『玉璽伝』のプロット選択は、政治的事件の背後で展開しているいわゆる家庭生活、中でも彈詞の本領である女性の心理描写を描くことに重点を置くという基本姿勢に基づくものであらうと考えられる。

なお、この二つのプロットの前後にはいくつか説白や詩などが挿入されているが、このプロットの中では説白は用いられないことを確認しておく。

4. 玉璽の行方～劉備の二夫人

前章で確認した『玉璽伝』における時間の操作が、本作品の基本的な指向である女性の心理描写の充実に向かっていることを確認した上で、本章では、作品の最大の特徴とも言うべき“劉備が玉璽を手に入れる物語”という側面から、彼を取り巻く夫人たちとのプロットを取り上げ、『玉璽伝』のほぼオリジナルのプロットの背景や効果について考えてみる。

★1で示したプロットは、『玉璽伝』の女主人公・邢姣花関連の物語である。この名は『演義』には全く見られない。表に示したとおり、劉備の命を救った邢姣花は劉備から玉璽を預かるが、宮中の井戸に身投げすることになる。玉璽がその後、孫堅（孫策）→袁術→献帝（実質的には曹操）→曹丕と渡るのは『演義』と同様であるが、劉備から邢姣花へ、そして最後に劉備の手元に戻る点が『玉璽伝』のオリジナルである。実は、非常にわずかではあるがこのプロットは『演義』に淵源がある。黄正甫本巻之一「董卓議立陳留王」には、外戚（何進）との争いに敗れ皇帝と陳留王らを連れ宮殿を出た張譲（と段珪）が北邙山に逃れるが、張譲は逃げ切れず河に身を投げ、玉璽は失われるという一段がある。『玉璽伝』ではこの河中の玉璽を劉備が拾うことになっている。また、同じく黄正甫本巻之二には「袁紹孫堅奪玉璽」という一条があるが、ここで董卓に焼かれた都で玉璽を抱いたまま井戸に身を投げた宮女が孫堅軍により発見されたことが描かれる。『玉璽伝』では、まさにこの宮女が邢姣花であるということになっている。このように見てくれば、邢姣花がこの二つのエピソードから着想を得た形象であらうと考えることはさほど難しくはないであらう。

さらに、邢姣花は身投げした後、仙女となり仙界で劉備との再縁を願っていたが、ふと煩惱が兆しある仙童に目を向けてしまったため、二人揃って下界に墮とされ、呉懿の妹と劉瑁として縁を結ぶことになる。しかし、劉瑁は間もなく亡くなり、最終的には劉備の後添えとして姻縁が完結することになる。つまり『玉璽伝』は、邢姣花を正史（『蜀書』第四）にも記述のある、劉備の継室・穆皇后（呉氏）⁽¹⁷⁾として設定していることがわかる。

このことから、『玉璽伝』のスタンスが極めて明確に見て取れる。すなわち、『玉璽伝』は一見『演義』からはかなり外れたプロットを採用し、独自色の強い作品として制作されているように見えながら、実は『演義』の設定を最大限利用し、それを逸脱しない範囲で物語を自在に変奏させることに全力を傾けているのである。もちろん、そこに物語の面白さを増幅させる効果が見込まれたからであらうが、その影に他の思惑も見え隠れする。邢姣花＝呉氏にスポットライトを当てて恋愛物語を展開した事情について考えると、史実で（『演義』でも）呉氏が元は劉備と同族の劉瑁の夫人であった、にもかかわらず敢えて再嫁させたという現実が目につく。『演義』でもこのことについては懸念が表明され、典故を持ち出し何とか納得するという措置がとられている（黄正甫本巻之十三「劉玄德哭関雲長」）が、『玉璽伝』ではそれでも不十分だとして呉氏が前世からの因縁で劉備と結ばれたというストーリーを用意し、二人の結びつきに必然性を持たせることによって、主人公・劉備の善玉ぶりを一層補強する効果を期待したのではないかと推察されるのである。

引き続き★2は、徐州太守・陶謙の配下であった糜竺の妹が劉備の夫人となるプロットであるが、これも上記の★1の問題と関わって、『演義』とは微妙な差異を見せている。『演義』での糜夫人は劉備軍が曹操からの追撃から逃れる途上、阿斗を趙雲に託して自らは井戸に身投げするエピソードで有名であるが、それ以外の場面では常に姉として仕える甘夫人と行動を共にし、とりたてて目立った性格付けはなされていない。これに対して、『玉璽伝』では「緑筠」という名前も付与され、その出会いにも縁が強調される。ある日、迷い込んできた蝶に名入りの匂い袋を持ち去られた

緑筠。蝶は麿竺らと碁を指していた劉備の冠の上に匂い袋を落とし、これが縁となり劉備は緑筠を妻とする。緑筠の来歴が印象的に描かれているが、ここで注目すべきはその死の経緯である。『玉璽伝』の麿氏は曹操軍が迫り来る中で、「夫人此時情無奈、只得含愁便起身。手抱高牆只一撞、牆頭倒下压傷身。子龍只便忙来救、只見夫人命付陰。」と、壁を自ら押し倒してその下敷きとなって死亡することになっている。井戸は全く出てこない。『演義』では井戸への身投げであったものをあえて圧死に変更したのはなぜか。これは、明らかに★1で邢姣花が董卓から身を守るために玉璽を抱いて井戸に身を投げたエピソードとの差別化を図るためであろう。

ちなみに『玉璽伝』で麿夫人は死後、仙界で暮らしており、甘夫人が夢で麿夫人に会い、仙界へ誘われ、まもなく甘夫人は亡くなる。その際、麿夫人は劉備に後添えのあることを予告するが、それは「大貴佳人今已長、十年之後会風雲。」という唱詞からも察せられるとおり呉氏のことを指しており、この直後に縁談のまとまる孫権の妹・孫万金のことではないのであり、この時点ですでに万金の暗い運命も暗示されている。

5. 悲劇の絶唱～孫万金のディスコース

次に、劉備のもう一人の夫人・孫万金のプロット★4を確認してみる。『演義』における万金は孫劉同盟の駆け引きが「嘘からまこと」を生んで劉備に嫁ぐが、二人の関係は良好であった。しかし、つかの間の平安の後、東呉の策略により離別を余儀なくされ、万金は最後まで蜀への帰国は叶わない。毛宗崗本では劉備死亡の噂を信じ入水して果て、嘉靖本、黄正甫本に至っては万金の最期を描くこともないなど、婚姻が破綻した後の彼女に役割は全く与えられておらず、それは連環計の後の貂蟬の描かれ方とも通じる。これに対して『玉璽伝』では万金が自らの境涯を嘆き、そこから抜け出そうと手を尽くし、それが叶わぬとなると出家を願い修養に励み、最後には元の仙女として天宮に戻る姿が見られる。

幸せな結婚生活に最初の不安の影が差すのは巻十六、劉備が西川へ出兵し万金は荊州へ一人残され、過ぎし三年の幸せな日々、今の孤独を吐露す

る。

夫人自別劉皇叔、捻指光陰又半春。不知征戰贏和敗、川里誰知怎樣能。東籬賞菊相分別、不覺梅花又報春。意涼錦帳鴛鴦枕、寒落春風孔雀屏。三年夫婦同歡樂、夜夜團圓日日親。早出香房移步緩、數番回首看奴身。晚來未至帘櫳下、滿面春風先喚人。倚肩執手殷勤意、軟款溫存言語親。同衾共枕多和愛、惜玉怜香意十分。雖然年紀非相稱、恩義綢繆不可命。奈何却為功名別、鴛鴦分伴鳳離群。使奴寂寞成孤別、影只形單好悶心。牙床繡枕成愁夢、銀灯寥落怕黃昏。宮娥侍女清閑坐、糸竹琴棋不動音。幸有孩兒閑嬉耍、聊消寂寞點愁心。

その後、兄の計略にはまり東呉へ帰ってきてしまった万金は、自分を軟禁する兄を恨み、夫を恋焦がれ、何とか近況を伝えようと出血多量で昏倒してまでしたためた血書を雁に託すも、偶然狩りをする孫権に射落とされ叶わない。老母病むとの偽報のために帰郷し、兄に軟禁され、母も亡き今、東呉で孤独な日々、血涙を流す私を一刻も早く救いに来てほしい、私が幽鬼となる前に。血書の悲痛な調べが流れる（巻十七）。

一從賞菊鉤顏別、荏苒光陰又幾春。不知收得西川否、未知軍事若何能？十六年秋分別後、十七年春妾軫吳⁽¹⁸⁾。只因家母沾災病、要奴相見故回程。不料被兄留住下、荊州隔絕不能行。聞得軍師身入蜀、料來阿斗也同行。多年不得音和信、望斷長天眼目昏。今歲母親身去世、哥哥兄弟盡無情。独守東呉真好苦、淒涼滿眼別無人。不知皇叔何時轉、不知夫婦幾時親。幽宮寂寞愁無尽、度日如年苦得禁。望夫莫負夫妻意、再到東呉相會情。莫負四年恩愛意、莫負隨君拋母親。刀槍不避从軍走、兵甲臨危我解情。因想百年同聚首、拋下親娘養育恩。从君只為終身靠、不道今為離別人。痛写血書多拜上、賓鴻送到望回音。血淚重重言不尽、歸鞭早軫莫遲停。相會早時還見面、相見遲時作鬼魂。

劉備が蜀で帝位に上り、呉氏を継室に迎えたという話が東呉にも届き、衝動的に髪を切るが、東呉の恥だと孫権から仏門入りも禁じられ、恋慕は恨みに変わる（巻二十）。

郡主終朝心内苦、如醉如痴不似人。雲髮月貌皆無了、半若頭陀半似僧。繡服羅衫無意正、金冠玉珮棄無形。怨苦不知時共節、愁煩那曉好光陰。從來恩義今何在？往日風流夢里尋。追思三年恩不淺、

一朝棄下便無情。西川又娶重婚婦，必定容顏十二分。若非傾国無双貌，難迷玄德此恩心。昔年他在東吳日，美女歌姬數百人。張昭暗設迷魂陣，誰陷他人寵幸心。今朝把我相辜負，一定他人貌出群。忍心奪了奴奴寵，害我今生不称心。幽宮怎了終身事，地陷天傾苦十分。發憤一時將髮剪，不僧不俗怎為人？哥哥不許修行去，幽住奴奴必喪身。

物語の最後で万金は遂に出家を果たし、煩惱を捨て去り、本来の仙女の姿に戻る。

万金郡主修行去，削髮為尼出御門。……夫人一意修真果，棄下凡情不在心。玉容洗淨脂粉，眉淡青顰絕翠痕。佩環珠玉多拋棄，緇衣素服是仙人。……雲雨忘情歸楚峽，煙霞有夢入山心。并頭蓮枝鴛鴦枕，金剪刀斷藕絲情。三生孽債今宵滿，一夢恩情化作塵。非是姻緣空用力，五百年前種孽根。紅絲一系成緣會，今世夫妻多少因。欲海無辺人不悅，回頭是岸碧澄清。六根洗淨無冤孽，一靈真性入天廷。明人不必多伝指，半言知悟本來因。夫人伶俐天生性，一旦回頭道便成。清福逍遙何必貴，紅塵離脱意分明。昔年之事皆成夢，三載恩情化作塵。多少英雄今不見，許多豪傑影無存。閑張劉備今何在，翻天功力那辺存？多謀公瑾今何處，奪利爭名枉用心。因此夫人多嘆息，虔誠一念不差分。年深月久功行滿，坐化龕中魄入雲。本是天宮仙玉女，償還凡孽脱紅塵。

万金の悟りを契機として、続けて語られるのは劉備たち三兄弟も今や天に帰り、鼎立した三国も晋に統一されるという物語の終局である。つまり、万金は作品全体が因果応報の結果として収束していくための象徴的な存在とも言える。作品の「正」の主人公が邢姣花＝呉氏であるとすれば、孫万金は堂々たる「負」の主人公として存在感を示す。付言すれば、万金は東呉の人間である。弾詞の本場の登場人物に対して、『演義』とは違った重責を担わせる操作が働いた可能性もあるだろう。彼女は『演義』ではいわば勝ち気一本槍であるが、『玉璽伝』ではその苦悩が唱詞によって豊かに幾重にも歌い上げられることによって、『演義』の世界にはついぞ見出すことのできない、自らの生き方を徹底的に内省する人物として存在することになったのである。

以上要するに、『玉璽伝』は物語時間の前後を破綻なく入れ替え、戦闘場面などは簡略化する一方、

主に女性の登場人物を焦点化し、その心情描写を細緻に表現することに傾注していると言えるが、特に最後の心情描写については唱詞の直接話法であるからこそ、切迫感を伴って、かつ自然に表現することが可能となったと考えられる。

おわりに～終盤の唱詞のディスコースと弾詞『天雨花』

2章で確認したとおり、『玉璽伝』のオリジナルプロットは各巻に配置されているが、最終盤に至ってその頻度は高まる。巻十六から万金の嘆きが語られ始め、巻十八からは邢姣花の転生譚が本格的に始まるのに歩調を合わせ、『演義』で描かれる緻密な戦闘場面、国同士の駆け引きなどは勢い簡略化しその分量を減らしている。そして、説白も巻十八・十九が一箇所、巻二十では完全になくなっている。ほぼオリジナルプロットで構成される巻二十において、説白で描写しても不思議はないプロット（曹丕の即位の件、山陽公毒殺の件など）もあるにもかかわらず、では何故頑なに全編唱詞になっているのかと考えれば、やはり説白に『演義』の本文を援用することが多い『玉璽伝』ならではの事情によるのであろうと推察される。しかし、実は前半の連環計のプロットでは『演義』の地の文での叙述を、『玉璽伝』で敢えて会話体に改編するなどの工夫も見られる。そのような前半の状況からすれば、やはり後半の説白の減少は片手落ち、或いは完成までに二十年間かかった執筆時間がその一貫性を失わせたのではないかと思わせるのである。

このような『玉璽伝』の終盤のディスコースについて考えるために、最後に、清代初期に執筆された『天雨花』の終盤を見てみたい。『天雨花』は明末の英雄・左維明とその友人一家合わせて五家が、時代の潮流に流されず魏忠賢ら数々の敵に敢然と立ち向かい、最後には滅び行く明朝に五家すべての者が殉ずるという激烈な歴史ものであるが、一方、左維明の娘・左儀貞という英雄的女性をはじめとする数多くの女性が家の内外で活躍し、その繊細な心情を切々と歌い上げるという弾詞の代表作であり、蔣瑞藻が『小説考証統編』で「南花北夢、江西九種」、すなわち『天雨花』を『紅樓夢』および蔣士銓の劇と併称したように極めて

人気の高い作品であった。現存する最古の刊本は嘉慶九（1804）年のものであるが、作者・陶貞懷による順治八（1651）年の序が付されている。ただ、陶貞懷という女性自身についての事績がほとんど不明で、また「陶貞」が彈詞の前身と考えられる「陶真」と同音であるため、その実在は疑いがもたれており、制作年代も順治年間と断定できない状況にある。とはいえ、明朝に殉じるという内容からすると文字禍の徹底される康熙以降とは考えにくく、清代初期の制作と考えて間違いなからう。

『天雨花』最終の第三十回では約六十回、唱詞と説白が交代し交互に叙述されていく。唱詞と説白の割合はほぼ同量であり、そのスタイルは作品全体を通して一貫している。この作品はいわゆる「擬彈詞」として上演は念頭に置かず文芸作品として享受されてきたと考えられるタイプの彈詞であり、実像は不明ではあるものの、おそらく一人の文人の手によって完成された作品であろうことはこのような合理的な体裁からも窺われる。最終回が若干急ぎ足で収束へ向かう嫌いはあるものの、彈詞の収場として常套の登場人物の「天界の星の生まれ変わり」としての後日談も用意されている。

盛氏が著書で述べるとおり、清初の歴史物を扱う彈詞、すなわち講史類彈詞は、前代の『二十一史彈詞』や『明紀彈詞』のような純然たる歴史物では既になく、その多くは「歴史上のある史実、あるいはある人物を取り上げ、それを敷衍させ、一つの物語に発展させる」という「歴史の生活化」を特徴としている⁽¹⁹⁾。『天雨花』はその代表的な作品である。一方『玉璽伝』の場合、作者は不明、また抄本が七字句の分かち書きを取ることも、決して読書用として楽しむためだけではない上演を想定した作品であったことが窺われ、その意味では『天雨花』との性格の違いは明確である。しかし、本稿で確認した『玉璽伝』の「歴史の生活化」された内容、また唱詞により歌い上げられた繊細な心情表現はまさに『天雨花』やその後に続く彈詞に通底するものであり、いわば未成熟とも言える『玉璽伝』の終盤の唱詞に偏ったデイスコースは、時代的に言ってもその後に続く彈詞の嚆矢的な作品としてとらえられる姿を呈している

のである。

注

(1) 童万周校点、弦声責任編集『三国志玉璽伝』（中州古籍出版社、1986年12月）「前言」。なお、『玉璽伝』のテキスト等については、後述注(5)の拙稿を参照されたい。本稿の引用はこの排印本により、頁数も同様。

(2) 「彈詞『三国志玉璽伝』的來源和成書時間考略」（『小説考索与文献鈎沈』所収、齐鲁書社、2010年9月）。

(3) 上述注(2)において、龔氏は明・袁宏道（1568-1610）に民衆の迎春の舞として「観音舞」に関する記述のあること（「迎春歌和江進之」）、また同じく明・張献翼（1534-1604）が「観音舞」について、現在ではこの曲が廃れているとの指摘を残していることから、張献翼の生前にはすでに流行が終わった曲であったとの見解を示している。

(4) 齐鲁書社、2008。作品の残る明代彈詞作品としては楊慎『二十一史彈詞』がよく知られているが、全編十字句の歌唱で通されるこの作品は、現存する一般的な彈詞との様相があまりにも異なる。盛氏はこの点から、明末の劇作家・薛旦による『醉月縁』第九折「彈詞」や、同じく明末の董説『西遊補』第十二回後半「擬琵琶季女彈詞」で歌われる彈詞の一節から、当時の彈詞の状況を推定することが可能であるとする。特に、『西遊補』における時調を用いるなど唱腔を固定しない「換調」が、彈詞における一大変化であると強調する。

(5) 「『三国志玉璽伝』における説白と唱詞のデイスコース」（『石巻専修大学研究紀要』第28号、2017年3月）。説白から唱詞への転換に際し、「～而回。」「～而別。」「～而去。」などという言葉で説白を締めくくり、空間の移動を意識させる技法がまま見られる。『演義』でも十分に描写されている戦闘の場面など（赤壁の戦いなど）は『玉璽伝』でも説白が多くなり、『演義』で描かれることのない、例えば恋愛のプロットなどは唱詞を多用する傾向が強い。

(6) 黄正甫本卷之十四「曹丕篡位称帝」、嘉靖本卷之十六「廢献帝曹丕篡漢」。

(7) 使用したテキストは陳翔華主編『北京藏黄成甫本三国志傳』（全二冊）（『三国志演義古版匯集』、国家図書館出版社、2009年12月）。

(8) このタイトルは嘉靖本では「白門楼曹操斬呂布」に作る。

(9) このタイトルは嘉靖本では「関雲長襲斬車胄」に作る。

『三国志玉璽伝』成書年代から考える唱詞のディスコース

- (10) このプロットは正史、『三国志平話』、『演義』には見られない。元雜劇に『関大王月夜斬貂蟬』があり、後述する注(14)についても元雜劇『寿亭侯怒斬関兵』に関羽の誕生日を祝う場面が描かれることから、『玉璽伝』の関羽に関するエピソードが元雜劇と深く関わっている可能性が高いと考えられる。
- (11) このタイトルは嘉靖本では「曹操決水淹冀州」に作る。
- (12) このタイトルは嘉靖本では「張飛據水断桥」に作る。
- (13) このプロットは『成化説唱詞話花関索伝』に関わるとみられる。
- (14) 上記注(10)参照。
- (15) このタイトルは本来は「龐德擡櫓戦関公」に作るが、意味が通らないので、嘉靖本により改める。
- (16) このタイトルは嘉靖本では「曹操殺神医華陀」に作る。
- (17) 『蜀書』では穆皇后について、「兄呉壹」とあり、『演義』などでおなじみの「呉懿」とは字句の異同がある。
- (18) 「十六年」「十七年」は建安年間、劉備が建安十六年に荊州を出発し、万金が翌十七年に東呉に戻ったことを指す。
- (19) 上述注(4)31頁。